

平成25年度実施
「研究活動の状況」に係る
外部評価報告書

平成26年3月
東京農工大学農学研究院

目 次

はじめに

- I 外部評価委員名簿
- II 外部評価実施目的・実施方針等
- III 外部評価実施スケジュール
- IV 外部評価委員による外部評価結果
 - (1) 評価一覧
 - (2) 総評
 - (3) 評価項目ごとの評価結果

はじめに

農学研究院では、科学技術の進展に貢献するとともに、農学、生命科学、環境科学、獣医学分野における諸課題解決とその実現を担う人材の育成と知の創造に邁進することを理念として、農工連携の教育研究及び社会貢献に取り組んでいます。

特に、法人化後を中心として、テニユアトラック制度の積極的な導入や女性研究者の支援制度の拡充など、不断の改革により研究力の強化や人材養成に取り組んできた実績を生かし、組織改革や大学院博士課程指導資格の再審査制度の導入等を踏まえた教員の人事制度改革を図り、研究力の向上とグローバルイノベーション人材の養成に寄与できる制度改革を推進してきました。

一方で、平成 26 年度～平成 27 年度は、大学改革の加速期間と位置づけられており、今回、その前年度の平成 25 年度に外部有識者の方々から、本研究院のこれまでの取組に対して意見等を賜るべく、外部評価を実施いたしました。

今回の評価でのご指摘やご意見を踏まえ、本研究院の教育・研究・社会貢献・管理運営等の改革を更に進めるとともに、第 3 期中期目標・中期計画の策定へも反映させる所存でございます。

最後になりましたが、評価委員の方々には、ご多忙の中、本研究院のためにご尽力いただきましたことに感謝申し上げます。

平成 26 年 3 月

東京農工大学農学研究院長

荻原 勲

I 外部評価委員名簿（五十音順）

大山 卓爾	新潟大学 自然科学研究科 教授
尾崎 博	東京大学 農学生命科学研究科 教授
五味 勝也	東北大学 農学研究科 教授
鈴木 滋彦	静岡大学 農学研究科 教授
丹下 健	東京大学 農学生命科学研究科 教授

Ⅱ 外部評価実施目的・実施方針等

【目的】

学外の有識者に外部評価委員を委嘱し、農学研究院の研究活動及び研究成果について、評価及び将来の提言を受け、農学研究院の運営の改善、活性化に役立てるものとする。

【実施方針】

- ・農学研究院において、研究活動状況に係る自己点検・評価を実施し、これに基づき外部評価委員が評価を行う。
- ・評価対象は農学研究院における研究活動状況及び研究業績とする。
- ・客観性を保持するため、大学評価・学位授与機構の「選択評価」の自己評価実施要領、評価実施手引書等を準用する。

【評価方法】

- ・項目ごとの評価ならびに研究院全体の評価は4段階評価
- ・観点ごとの評価は3段階評価
- ・評価結果は、評価の平均値となる平均評価点を四捨五入し、評価の総意と見なす
- ・評価項目
 - A 研究活動の実施状況・・・研究院の目的に照らして、研究活動を実施するために必要な体制が適切に整備され、機能していること
 - B 研究成果の状況・・・研究院の目的に照らして、研究活動が活発に行われており、研究の成果が上がっていること
- ・項目ごとの基本的な観点
 - A-1 研究の実施体制及び支援・推進体制が適切に整備され、機能しているか。
 - A-2 研究活動に関する施策が適切に定められ、実施されているか。
 - A-3 研究活動の質の向上のために研究活動の状況を検証し、問題点等を改善するための取組が行われているか。
 - B-1 研究活動の実施状況から判断して、研究活動が活発に行われているか。
 - B-2 研究活動の成果の質を示す実績から判断して、研究の質が確保されているか。
 - B-3 社会・経済・文化の領域における研究成果の活用状況や関連組織・団体からの評価等から判断して、社会・経済・文化の発展に資する研究が行われているか。

Ⅲ 外部評価実施スケジュール

- ・必要資料・データ収集、自己評価書作成（～平成25年12月）
- ・各学科へ外部評価委員推薦依頼（平成25年7月2日）
- ・農学研究院運営委員会にて自己評価書について報告（平成26年1月7日）
- ・外部評価委員への委嘱手続き及び評価関係資料の送付（平成26年2月21日）
- ・外部評価委員から書面評価シート提出（～平成26年3月25日）
- ・評価報告書案を作成及び報告（平成26年3月28日）
- ・外部評価委員へ評価報告書(案)の送付（平成26年3月28日）
- ・農学研究院運営委員会構成員に外部評価実施の報告（平成26年3月31日）

IV 外部評価委員による外部評価結果

(1) 評価一覧

評価者	観点 A1	観点 A2	観点 A3	項目 A	観点 B1	観点 B2	観点 B3	項目 B	研究院 全体
A	2	3	3	4	2	3	2	3	4
B	3	3	3	4	2	3	3	4	4
C	3	3	3	4	3	3	2	3	4
D	3	3	3	4	2	3	3	4	4
E	3	3	2	3	3	2	2	3	3
平均評価点	2.8	3.0	2.8	3.8	2.4	2.8	2.4	3.4	3.8

(注) 順不同 外部評価員名簿順 (五十音順) ではありません。

※観点ごとの評価は3段階評価であり、「目的をふまえ期待される水準を上回る」を3点、「目的を踏まえ期待される水準である」を2点、「期待される水準を下回る」を1点として数値化した。

※項目ごとの評価ならびに研究院全体の評価は4段階評価であり、「目的の達成状況が極めて良好である」を4点、「目的の達成状況が良好である」を3点、「目的の達成状況がおおむね良好である」が2点、「目的の達成状況が不十分である」を1点として数値化した。

※評価結果は、評価の平均値となる平均評価点を四捨五入し、評価の総意と見なした。

(2) 総評

東京農工大学農学研究院は、「研究活動の状況」において、目的の達成状況が極めて良好である。

■主な優れた点として、以下の項目が挙げられる。

- ・ 研究組織と教育組織の明確な区別と管理運営体制の整備への積極的な取組が行われている。
- ・ テニュアトラック制度による独立した若手研究者の採用と実績がある。
- ・ 女性研究者に対する支援体制の整備への積極的な取組が行われている。
- ・ 融合的な研究を機動的に行うことを可能にする組織体制の整備への積極的な取組が行われている。
- ・ 研究活動を活性化する支援組織・事務組織体制の整備への積極的な取組が行われている。
- ・ 研究指導資格の見直し等の評価制度の整備への積極的な取組が行われている。
- ・ 原著論文発表数及び科学研究費補助金申請数から、活発な研究活動が行われている。
- ・ 原著論文の被引用回数及び学術専門誌のインパクトファクターなどから、研究成果の質を確保している。
- ・ 海外の世界大学ランキングにおいて、いくつかの研究分野で高い評価を得ている。
- ・ 社会貢献・国際貢献活動を活発に実施している。

■主な更なる向上が期待される点として、以下の項目が挙げられる。

- ・ 国際化に対する体制の整備。
- ・ 昇進を含めた教員の活力を活かす積極的な取組の実施。
- ・ テニュアトラック以外で採用された教員層の研究業績の維持・向上を図る施策の実施。
- ・ 評価結果に基づき施策を立案し、研究活動の活性化を促進する明確なシステムの整備。
- ・ 研究業績をより把握できる評価指標の導入。

■主な改善を要する点として、以下の項目が挙げられる。

- ・ 研究活動の実施状況及び研究成果の質において、第1期中期目標期間と比較して第2期中期目標期間の業績が減少傾向にあるので、今後、論文発表や申請等に係る支援を組織的に強化する必要がある。

(3) 評価項目ごとの評価結果

○研究活動の実施状況

観点 A—1：研究の実施体制及び支援・推進体制が適切に整備され、機能しているか

観点 A—2：研究活動に関する施策が適切に定められ、実施されているか

観点 A—3：研究活動の質の向上のために研究活動の状況を検証し、問題点等を改善するための取組が行われているか

【評価結果】

目的の達成状況が極めて良好である。

(評価結果の根拠・理由)

研究の実施体制の整備、不断の大学改革や研究活動の活性化を図る施策が着実に実施されており、大学院の重点化と研究重視型の大学として研究組織と教育組織を明確に分離し、より柔軟な教育・研究組織の機動的な編成が可能となっている。また、2 研究院間の融合を促進する仕組みとして連携リングが構築されている。研究支援・推進のための組織としては学術研究支援総合センター、先端産学連携研究推進センターを設置し、リサーチ・アドミニストレーター (URA) の育成や確保にも努めている。研究推進・支援組織については、全学または農学研究院独自のセンター及び施設等及び事務組織が置かれ、各々研究支援・推進のための業務を遂行している。今後、外国人教員の積極的登用や留学生の受け入れなどの対応のため、国際化に対する体制の整備が期待される。

研究活動に関する基本的な施策は、全学計画評価委員会及び研究部会において、中期目標・中期計画として定めており、テニュアトラック制度、女性研究者・教員の養成、次世代研究プロジェクトの立ち上げ支援などの多様な取組を実施している。農学研究院においては、各担当委員会が研究院における実行計画を策定し、実施している。また、女性未来育成機構や府中キャンパス内における保育所の設置などにより女性研究者の活躍を支援している。今後、助教の積極的な昇進を含めた優れた業績を有する教員の活力を活かす取組とともに、テニュアトラック以外で採用された教員層の研究業績の維持・向上を図る施策が期待される。

研究活動の状況を検証する取組は、全学計画評価委員会及び研究部会において定期的実施しており、農学研究院では、自己点検・評価を基礎とする外部評価を実施している。評価結果に対する改善措置は、全学計画評価委員会等において検討し実施している。また、個人における評価については、大学院における研究指導資格の再審査基準を策定し一定期

間ごとに再審査を実施しており、教員活動評価を毎年度実施している。今後、評価結果に基づき施策を立案し、研究活動の活性化を促進する明確なシステムの整備が期待される。

【優れた点】

- ・ 研究組織と教育組織の明確な区別と管理運営体制の整備への積極的な取組が行われている。
- ・ テニュアトラック制度による独立した若手研究者の採用と実績がある。
- ・ 女性研究者に対する支援体制の整備への積極的な取組が行われている。
- ・ 融合的な研究を機動的に行うことを可能にする組織体制の整備への積極的な取組が行われている。
- ・ 研究活動を活性化する支援組織・事務組織体制の整備への積極的な取組が行われている。
- ・ 研究指導資格の見直し等の評価制度の整備への積極的な取組が行われている。
- ・ 女性研究者への積極的な採用もあり、理系でありながら女子学生が多く、女子学生の勉学意欲効果が期待される。

【更なる向上が期待される点】

- ・ 国際化に対する体制の整備。
- ・ 昇進を含めた教員の活力を活かす積極的な取組の実施。
- ・ テニュアトラック以外で採用された教員層の研究業績の維持・向上を図る施策の実施。
- ・ 評価結果に基づき施策を立案し、研究活動の活性化を促進する明確なシステムの整備。
- ・ 早稲田大学との共同大学院（共同先進健康科学専攻）の成果を他専攻に生かす試みがあってもよい。
- ・ URA の活用により、今後の大型プロジェクトや産学連携プロジェクトなど推進が期待。
- ・ テニュアトラック修了後のサポート体制に期待。

【改善を要する点】

- ・ 農学研究院が 11 部門、学科が 5 学科と組織が複雑で教員の負担、学生や社会から理解しにくいという問題があるのではと思われるため、組織的な対応と取組を強化する必要がある。

○研究成果の状況

観点 B—1：研究活動の実施状況から判断して、研究活動が活発に行われているか

観点 B—2：研究活動の成果の質を示す実績から判断して、研究の質が確保されているか

観点 B—3：社会・経済・文化の領域における研究成果の活用状況や関連組織・団体からの評価等から判断して、社会・経済・文化の発展に資する研究が行われているか

【評価結果】

目的の達成状況が良好である。

（評価結果の根拠・理由）

研究活動の実施状況については、平成 19～24 年度の原著論文について、教員一名当たりの平均 2.2 報が国内外の学術専門誌を中心とした研究出版物に公表されているほか、科学研究費補助金は、過去 6 年間では 654 件を申請しており、教員の現員数から算定した申請率は約 64%となっており、研究活動は活発に行われている。第 1 期中期目標期間中（平成 19～21 年度）より第 2 期中期目標期間中（平成 22～24 年度）の論文数は減少しており、平均一人 1 件以上の科学研究費補助金の申請数も達成していないので、今後、論文発表や申請に係る支援を組織的に強化する必要がある。

研究活動の成果の質については、原著論文の被引用回数及び論文が発表された国外の学術専門誌のインパクトファクター及び科学研究費補助金の採択件数並びに新規採択額から把握できるように研究成果の質を確保している。また、QS 社の分野別世界大学ランキング 2013 において、AGRICULTURE & FORESTRY 分野における研究レベルが VH (VERY HIGH) と評価されるなど海外の世界大学ランキングで高い評価を得ている。今後、原著論文の被引用回数及び学術専門誌のインパクトファクターのみでは測定が難しい研究分野もあるので、他の評価指標の導入が期待される。また、第 1 期中期目標期間中（平成 19～21 年度）と比較して第 2 期中期目標期間中（平成 22～24 年度）のインパクトファクターを有する学術専門誌への論文投稿数は同数であり、今後、評価の高い学術雑誌への投稿をさらに奨励する必要がある。

社会・経済・文化の領域における研究成果の活用については、研究成果を活用する農学研究院等の特徴を活かした多くの取組を実施している。また、JICA 草の根パートナー型技術協力事業を長期間に渡って実施し、関係者から高い評価を受けている。

【優れた点】

- ・ 原著論文発表数及び科学研究費補助金申請数から、活発な研究活動が行われている。
- ・ 原著論文の被引用回数及び学術専門誌のインパクトファクターなどから、研究成果の質を確保している。
- ・ 海外の世界大学ランキングにおいて、いくつかの研究分野で高い評価を得ている。
- ・ JICA 草の根技術協力事業など社会貢献・国際貢献活動を活発に実施している。

【更なる向上が期待される点】

- ・ 研究業績をより把握できる評価指標の導入。
- ・ 優れた研究活動を学内・部局内で組織的にサポート&エンカレッジする制度の設計と見直しが求められる。

【改善を要する点】

- ・ 研究活動の実施状況及び研究成果の質において、第1期中期目標期間中（平成19～21年度）と比較して第2期中期目標期間中（平成22～24年度）の業績が減少傾向にあるので、今後、論文発表や申請等に係る支援を組織的に強化する必要がある。